

文化のチカラ

VOL
08

2018
Summer

特集.. 「しまび」でアートを考える。



企画展

17

8/9(木) - 19(日) ※8/14(火)は休館
10:00 - 18:00 (入館は17:30まで)

佐世保市博物館島瀬美術センター 4F
入場無料

●トークイベント
「写真で浮かびあがる佐世保のリアル」
8/12(日) 14:00 - 15:00



松尾修 (17) 2018年

西端の街、17歳たち。写真家・松尾修によるサセボプロジェクト第4弾の「17」を取り上げる展覧会。2017年に撮影された佐世保の17歳たちのポートレート。山と海に隠された港街ならではの風景の中で、モノクロフィルムに焼きつけられた若者たちは、この街に住む私たちに何を語りかけてくるのか。

開館35周年記念 特別展

ユニマットコレクション
フランス近代絵画と珠玉のラリック展
- やすらぎの美を求めて -

10/20(土) - 12/2(日) ※会期中休館日なし
10:00 - 18:00 (入館は17:30まで)
金・土・祝前日・12/2は
10:00 - 20:00 (入館は19:30まで)

佐世保市博物館島瀬美術センター 1F-4F
入場料 一般 1,200円
大学・高校生 1,000円
中学生 800円
小学生・未就学児 無料



ピエール=オーギュスト・ルノワール 〈髪を結う少女〉
1896年

ミレーやルノワール、藤田嗣治など19世紀から20世紀にかけてフランス近代絵画を彩った名作71点と、アール・デコを代表する工芸家ラリックのガラス作品の展覧会。

〈会期中さまざまな関連イベントを開催!お楽しみに!〉

こちらも
チェック!
CHECK

毎月、市内文化施設のイベントカレンダーを佐世保市ホームページ、facebook ページ「文化のチカラ」に掲載しています。

十七歳の僕は

曇りきつた不機嫌な眼差しで

世界を見ていた。



17

- Interview -

OSAMU MATSUO

今夏、佐世保の17歳をテーマにした写真展が島瀬美術センターで開催されます。撮影したのは、東京を拠点に活動する写真家 松尾修さん。佐世保をテーマにした出版プロジェクト「THE SASEBO PROJECT」で、今回取り上げる「17」を含む4冊の写真集を発表している松尾さんに、展覧会と写真やアート、佐世保についてお話を聞きました。



「17」は、不思議な雰囲気を持った写真集ですね。

2017年の佐世保の17歳を記録したポートレート集であり、サセボプロジェクト※1の第4弾として撮影・制作しました。「佐世保」を間接的に浮かびあがらせることを狙ったのですが、同時にいつどこで撮影したのかわからない独特の空気感が出せたと思います。モノクロフィルムや、17歳という年齢の持つ不安定さ、ある意味、時間に取り残されたような佐世保の風景も、その印象を形作るひとつの要因かもしれません。

それは面白いですね、現実の佐世保なのに違う時代や街にも見えるという。

写真は、現実を写すものだと思なさん考えがちですが、僕はそう思いません。実は、今回、僕がどのような意図を持って撮影しているか、ということも被写体である彼らには伝えていません。そこにはつきりした共犯関係が生まれていて……まあ、そこまでしなくとも、カメラを向けられた時点で、誰もが撮られていることを意識しますよね。それはありのままの現実を切り取

ることは全く異なります。そして、その「嘘」を含んでいることこそが、写真の持つ魅力のひとつだと僕は思っています。親御さんたちは、もっと生き生きとした写真を撮ってほしかったかも知れませんが、それだってフィクションですよ(笑)。

写真家である松尾さんが、そもそも写真という表現を選んだ理由はなんだったのでしょうか。

もともと僕は、布団の中で「いつか自分も自分の親もみんななくなってしまうんだ」ということを考えては、眠れなくなってしまうような子どもでした。小説や映画を見ても「もの悲しさ」や「不確かさ」、「失われていくもの」に強く惹かれてしまう人間です。先ほど「嘘」という言葉を使いましたが、写真に写っているものは、すべて過去のもので今は存在しません。撮影から1年しか経っていないけれど、「17歳の彼ら」ももうどこにもいないし、それは、とても写真らしい表現であるとも言えます。写真を学んだきっかけは、受験に失敗したなりゆきですが、僕の個人的な感情を表現する上で、とてもしつくりきっています。

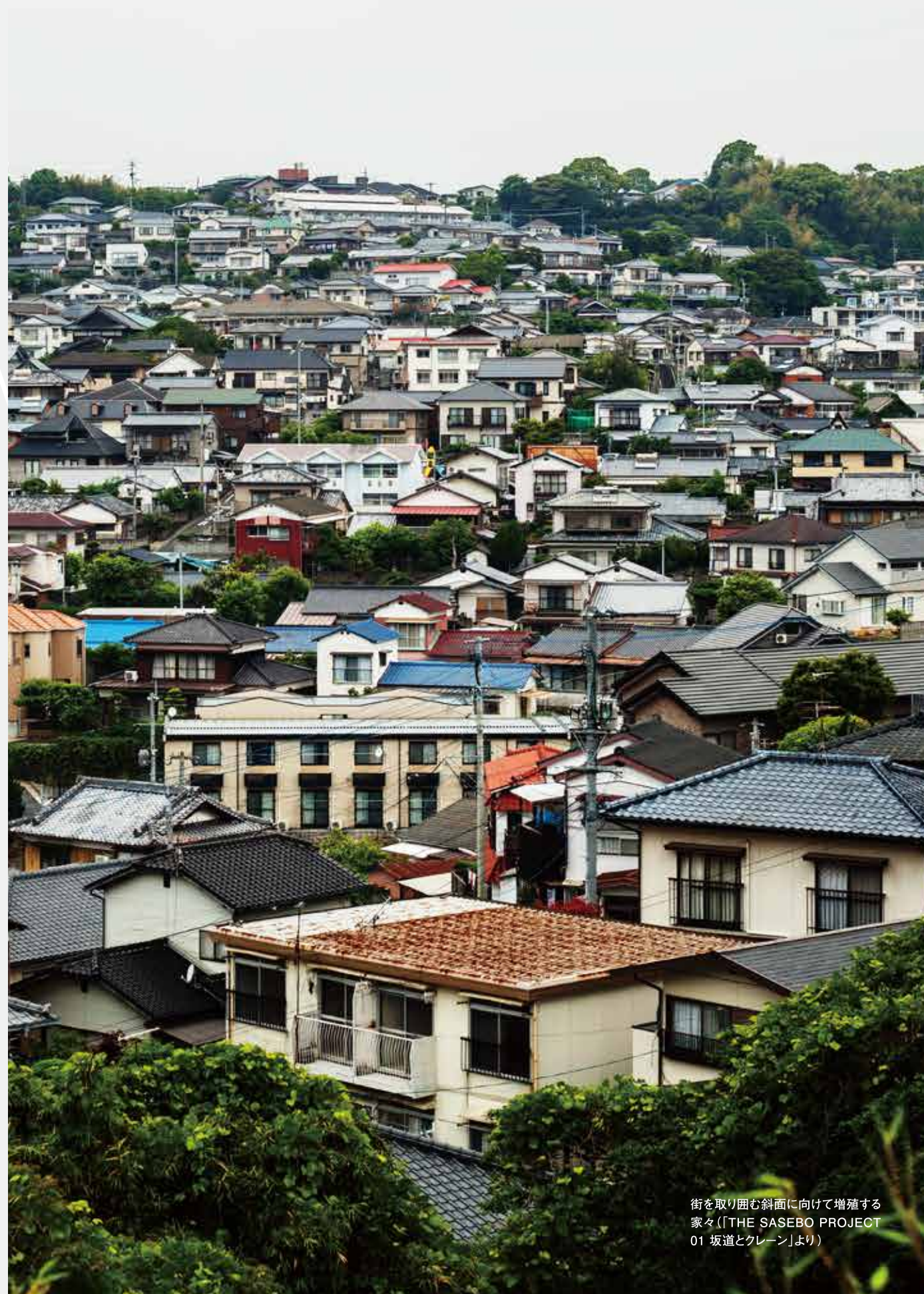
サセボプロジェクトもそのような個人的な表現のひとつとしてスタートされたのですか？

これまで、東京で広告などいわゆる商業写真のカメラマンとして生活をしながら、写真家としての個人的な作品を出版してきました。そんな中、故郷を離れて時間が経つほど、他の街にはない佐世保の異質さを強く意識するようになっていました。きっかけは、単純に「その写真集を見てみたい」という佐世保の被写体としての魅力で、それまで作ってきた自分の作品制作の動機とは異なります。そこで、今回は「プロジェクト」というスタイルをとることにしました。あくまで主役は佐世保であり、その面白さを引き出すために、毎回、設定するテーマによって、使用する機材、雰囲気やいわゆる作風も敢えて大きく変えています。編集長の僕が、カメラマンの僕に指示して作らせているというイメージですね。

※1 THE SASEBO PROJECT(サセボプロジェクト)佐世保出身の写真家 松尾修による佐世保をテーマにした出版プロジェクト。造船所で働く男たちを撮った「HEAVY METAL」夜の街で働く女性にスポットを当てた「誰かのアイド」などを現在4つの写真集が発表されている。

THE SASEBO PROJECT

17



アートとはなんだと思いますか？

僕は、アートの本質は、共感の仕方が人によって違うところにあると考えています。同じ一枚の写真を見ても、それぞれの記憶の引き出しから違うものを取り出して感情が動く。人はみんな違うんだということがわかる、それが面白い。同じクリエイティブでも「マーシャルは逆で、「カッコいい」「欲しい」など、多くの人に狙ったつもの共感を生み出すものです。サセボプロジェクトも、「佐世保の面白さを引き出す」という目的に合わせて表現手法を変えろという意味では、商業写真に近いアプローチでしたが、僕の作家性であったり、クセのようなものが紛れ込んでいて、結果的に、商業カメラマンとしての自分と、写真家としての自分との間に位置していると言えるかもしれません。実は、毎回、テーマに合わせて既存の作品のオマージュを制作に取り入れているのですが、特に今回の「17」は、写真家としての自分が大きく影響を受けた橋口譲二さん(※2)を意識して、これまでのプロジェクトの作品の中でも僕のパーソナルな部分が強めに出ていると思います。

プロジェクトを通じて改めて佐世保のことをどう思いますか。

成り立ち、地勢、住む人に恵まれた全国的、世界的にもスペシャルな街だと思います。よく東京から友達を連れていくんですが、みんなそう思ってくれてるんじゃないかな。佐世保の人はよく「何も無い」と言うけれど、今、住んでいるところというのは、たとえどんな場所でも基本的につまらないものですよ。でも、それを差し引いても、この街は特別なんだということに気づいてほしいなと思います。おこがましいかも知れないけれど。

※2 橋口譲二(はしぐちじょうじ) 1949年鹿児島県生まれ。写真家。特定のテーマのもとに撮影した多数の人物を取り上げるというスタイルで、数多くの写真集を手掛ける。作品に「17歳」「Father」など。



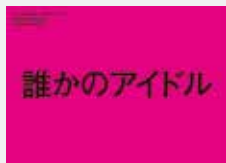
松尾 修
まつお おさむ

1970年佐世保市生まれ。日本大学芸術学部写真学科中退。出版社のカメラアシスタントを経て、1995年独立。3冊の写真集を発表後、2014年から故郷、佐世保の魅力を再認識し、ジャーナリスティックな視点から捉える出版プロジェクト「THE SASEBO PROJECT」を展開している。作品に「写真論」(2012年)など。

THE SASEBO PROJECT



01 坂道とクレーン



02 誰かのアイドル



03 HEAVY METAL



04 17

街を取り囲む斜面に向けて増殖する家々(「THE SASEBO PROJECT 01 坂道とクレーン」より)

M2F-4F

持ちこみ企画募集中！
企画展示室

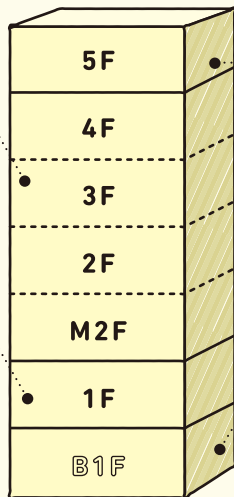
市民の作品発表の場としての提供のほか、所蔵品展、企画展や特別展を開催しています。

1F

こだわりコーヒーを楽しんで！
フリースペース・カフェ

吹き抜けて開放感のある市民の文化活動用の無料フリースペースです。ミュージアムコンサートや、展示会の関連イベントなども随時行っています。併設されたカフェでは、コーヒーや軽食が楽しめます。

SHIMABI



5F

考古展示室

世界最古級の豆粒文土器の展示のほか、遺物やパネルを通して佐世保の原始から現代を感じることが出来る展示スペースです。1Fのしまびマスコットせんぶくまるの実家です。

B1F

僕を描きにおいでよ！
デッサン教室

毎週日曜、講師を迎えデッサン教室を行っています。参加者は随時募集中。佐世保で一番、石膏像が集まっているという噂も。

僕の家族はここに住んでいるよ。



「しまび」はどんな施設なの？
A
博物館であり美術センターである「しまび」。スッキリ図解しましょう。

Q 「しまび」はどんな施設なの？

なぜ、民間から市立の「しまび」にいられたのですか？

A

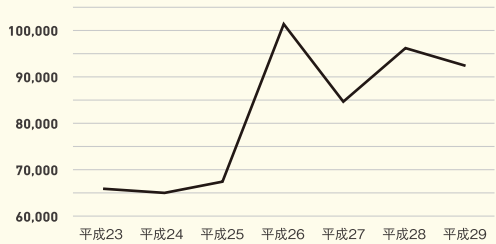
大好きだった「美術」を仕事にして30年あまり、多くの展覧会に関わり幸せでしたが、その集大成「ゴッホ展」に取り組んだ後、評価の定まった美術以外にも関わりたい気持ち芽生えました。かつこよく言えば、学芸員として「新たな佐世保の美術史を作る」仕事をしてみたい。気づけば市役所の面接を受けていたんです(笑)。

自主企画展数は、日本一！※
入場者数もぐーんと伸びているよ。



※平成27年度 月刊「アートコレクターズ」国公立美術館アンケートより

入場者数(人)



A

佐世保を美術で元気に！

Q これからの「しまび」の見所は？

市民のみならずにはもっと質の高い作品を、市外からお越しになるお客様には佐世保ならではの面白さを提供していきます。8月に予定している佐世保出身、松尾修さんの写真展「17」は、その2つの視点を備えた企画展です。「美しさ」だけではない佐世保の独特の切りとり方に注目です！また秋の特別展では、リクエストの多かったフランス近代絵画展を開催します。お楽しみに！(企画展、特別展の詳細は本紙裏面をご覧ください)

しまびって？

1983年4月、美術、考古、民俗などに関する資料の収集、保存、展示及び調査、研究、併せて美術品の展示をする場の提供を行い、市民の芸術文化振興の拠点とするべく島瀬公園と一体的に整備。建設当時、美術館には珍しかったタワー構造やギリシャ神話をモチーフにした意匠が特徴。

正式名称 佐世保市博物館島瀬美術センター
 開館時間 10:00~18:00(入館は17:30まで)
 休館日 火曜日、年末年始(12/29-1/3)
 電話番号 0956-22-7213



知ってた？
外壁にはギリシャ神話の12神が描かれているんだ。



佐世保市博物館
島瀬美術センター館長
安田 恭子
やすだ きょうこ

長崎生まれ。九州産業大学芸術学部美術学科卒。1987年長崎オランダ村(現ハウステンボス)入社後、学芸員として場内の美術館立ち上げと学芸・運営業務に従事。ハウステンボス美術館・博物館館長代理を経て、2013年佐世保市博物館島瀬美術センター館長に就任。九州博物館協議会理事、長崎県博物館協会副会長。趣味はバイクとピアノ。

「しまび」の
マスコットの存在
せんぶくまる



博物館でもある「しまび」の5階展示室に再現された「泉福寺洞窟ジオラマ」から飛び出したセンターのマスコットの存在。1Fあたりで、来館者をお出迎えています。季節や企画に合わせて変わる衣装やコメントも密かな話題に。

安田館長に聞く！

「しまび」とアート



開館30年にして初の海外展開催や、アイデア溢れる多くの企画展で、「しまび」の可能性を広げ続ける安田恭子館長に「しまび」とアートについて聞きました。

Q

そもそも「しまび」って何のためにあるんですか？

A

市民の「見たい」見てもらいたい」に
応える施設です。

「佐世保でも質の高い美術や歴史に触れたい」「情熱を注いだ作品をみんなに見てほしい」そんな気持ちに応えながら、佐世保の文化の持つ可能性を広げ、市民のみならずが誇りに思える施設になることを目指しています。



Q ずばりアートってなんですか？

A 人生をもっと豊かにしてくれるアイテムです。

専門の絵画について言うのと、描かれた時代や作者の思いなど、隠されたメッセージを読み解くプロセスは鑑賞の醍醐味です。たった一枚の絵から、見た目の美しさだけではなく、日常つい忘れがちで、人生において大事な気づきや感動、生のはかなさや死といったことまで考えさせられてしまう。それが、芸術やアートの持つチカラだと思っています。



満員のロビーコンサート「坂道のアポロン展」

Q

美術館やアートはむずかしくて敷居が高く感じるのですが。

A

もっと気軽に考えて。美術館はみんなに開かれたものです。

佐世保のみならずは、まだまだ美術に構えている人も多いように感じます。今、私に求められているのはその心のハードルを下げること。「映画」や「競輪」など身近なテーマを取りあげた企画展やイベントもたくさん開催しています。ぜひホームページやフェイスブックをチェックしてみてください！



競輪選手のクロッキー(写生)会
「銀輪にかけるアスリートの世界展」

ホームページ <http://www.city.sasebo.lg.jp/kyouiku/simano/>

フェイスブック <https://www.facebook.com/saseboshimabi/>